

道徳通信かがわ

第28号

平成29年12月5日(火)

香川県教育委員会事務局

義務教育課

11月22日、三豊市観音寺市学校組合立三豊中学校において、矢野辰弥先生と長谷川絵里先生による道徳の授業が公開されました。道徳の授業では、児童生徒の実態を把握し、共通理解、共通実践することが求められています。今回は、その視点から授業を紹介します。

児童生徒の実態を生かして —研究推進校 公開授業から—

授業では「星置きの滝」という資料を用いて、「友情・信頼」(B(8))を扱いました。資料の内容は、次のようなものでした。

「わたし」の友人を選ぶ観点は、「この人間とつき合って損か得か」でした。しかし、そんな「わたし」にも、I君は、誠意を込めて接してくれました。

ある時、I君は「わたし」をキャンプに誘います。そして、満点の星を見ながら「わたし」に語りかけます。

「星は、一つ一つが互いに輝き合おうとしているから美しいんだなあ。」と。

それを聞いた「わたし」は、それまでの自分を振り返り、涙があらわれてくるのでした。

授業は、事前のアンケート結果を示し、生徒の実態を取り上げるところから始まりました(右写真参照)。

アンケートでは、「あなたにとって『親友』とは、どのような友達のことですか」という質問に対し、多くの生徒は「自分を認めてくれる」「仲良くしてくれる」「自分のことを分かってくれる」と答えていました。他にも「長い間つきあっている」「何でも言い合える」「勝手に『親友』とされていることもあるのでは」などの回答があり、生徒の考えの多様さが現れていました。普段から、一人一人の生徒が友達を見つめ、その生徒なりに感じ、考えていることがうかがえました。

そして、この授業を深める鍵の一つが、「星は、一つ一つが互いに輝き合おうとしているから美しいんだなあ。」というI君の言葉です。「輝き合おうとしている」とは、どんな関係なのか。

ここで授業者は、アンケート結果に着目させました。そして、多くの生徒が考えていた「～してくれる」ではなく、「何でも言い合える」「協力し合う」という「～し合える」という関係が、I君の言う「輝き合う」という関係であることに気付かせていきました。

授業後の討議の様子にも目をみはるものがありました。三つのグループに分かれて話し合いを行ったのですが、どのグループも笑顔で意見を出し合い、道徳について語り合うのが楽しいという雰囲気がありありと感じられました。

児童生徒の実態に即して授業をするためには、このような協働体制が大切になります。授業者と、生徒と、そして参会の先生方一人一人も輝き合った授業だと感じました。



【アンケート結果を提示】



【真剣、かつ和やかな討議】